



# 日本国際教育学会

## JIES NEWSLETTER

January 2018 No.29

### ニューズレターダイジェスト

- 学会長挨拶
- 西村俊一先生の思い出
- 第28回大会報告
- 第28回総会報告
- 決算報告及び予算案
- 『国際教育』第24号原稿募集
- 第29回大会のお知らせ
- 2018 Conference Information
- 事務局だより



課題研究Ⅰ：「日豪比較を通じた先住民族の指導者・教員養成の展開と課題」

### 学会長挨拶

佐藤千津（国際基督教大学）

#### この1年を振り返って

本学会の会長に就任し、早くも1年が過ぎました。昨年の Newsletter 第28号では学会活性化のための重点課題について述べましたが、どこまで進めることができたでしょうかと振り返っております。

2017年のはじめには第9-10期会長を務められた西村俊一先生のご逝去という悲報に接しました。惜別の思いを禁じ得ませんが、本学会の創設と発展に大きな足跡を残された西村先生に心からの感謝を申し上げるとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。今号では西村先生を偲び、所縁の深い方々に在りし日の思い出をお寄せいただくことにしました。

9月には吉田尚史理事のご尽力により、第28回大会を福岡女学院大学で開催することができました。九州での開催は2度目で約20年振りとなります。古くから東アジア諸地域との異文化交流の窓口として重要な役割を担ってきた福岡の地で、多文化共生をテーマとする本大会を開催できたことに大きな意義を感じます。福岡女学院大学をはじめ、ご協力いただいた関係機関の皆様にご心よりお礼を申し上げます。

今大会は国際連携においても意義のあるものとなりました。今期の国際連携活動にはオセアニア比較国際教育学会（Oceania Comparative and International Education Society: OCIES）との交流活動があります。これは同学会のゼーン・マ・レーア氏（モナシュ大学）と本学会の前田耕司理事（早稲田大学）との長年の研究交流をもとに着想されたものですが、同じ国際教育分野の学会として連携することで双方の国際学術交流の発展を企図した活動です。

OCIES は 1973 年に創設されたオーストラリア比較教育学会（Australian Comparative Education Society: ACES）を前身とする学会で、1983 年にはオーストラリア・ニュージーランド比較国際教育学会（Australian and New Zealand Comparative and International Education Society: ANZCIES）に名称変更されています。さらに近年の組織拡大に伴い、2015 年に現在の名称に変更されました。本学会と比較するとその歴史は長く、会員数も多い学会です。今年も国際連携の第一歩として会員の相互派遣を実現し、OCIES のゼーン・マ・レーア氏らを第 28 回大会に招聘するとともに、11 月の OCIES 第 45 回大会に本学会から会長らが参加して交流活動を行いました。今年、OCIES では役員改選があり、AGM の席でゼーン・マ・レーア氏が共同会長（Co-Presidents）の一人に選出されたことは嬉しいサプライズでした。ゼーン・マ・レーア氏は 9 月に本学会にも入会されましたので、今後、ますます研究交流を深めていけるものと思います。

この連携活動とは直接は関係しませんが、OCIES のジャーナルである International Education Journal: Comparative Perspectives は原則として年 2 回発行されています。論文の投稿などをご検討いただければと思います。

学会が創立され、まもなく 30 年になります。記念の年に向け、国際教育の名にふさわしい充実した学会活動を展開していきたいと考えておりますので、会員の皆様には引き続きご協力をお願いいたします。

---

## 西村俊一先生の思い出

本学会の創立時から多大な貢献をされた西村俊一先生（東京学芸大学名誉教授）が 2017 年 1 月 29 日にご逝去されました（行年 75 歳）。西村先生は、第 9-10 期会長、第 15-16 期紀要編集委員長、第 16 回研究大会の実行委員長などの要職を務められ、本学会の発展にご尽力されました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

---

### 西村俊一先生の思い出

浅沼 茂（立正大学）

西村先生との思い出は、この筆耕で尽くすことはできません。でも、西村先生と最も親しかった者の一人として、この機会を生かしたいと思います。

西村先生の生き方は、同郷の英雄、江藤新平を思い起こさせます。天下国家を論じながら、薩長閥の不正を弾劾するという司法界において正義を貫くという生き方は、人一倍正義感の強い西村先生の本懐でもあったかと思えます。

西村先生との出会いは、私が東京学芸大学を 1974 年の 3 月に卒業する直前に東大の学校教育専門課程の事務室兼助手室を訪ねたところから始まります。当時の私は、東大に自分の出身大学と同じ名前の専門があるなどとは知りませんでしたし、ましてや教育方法や内容や比較教育など 4 つもの講座が同じ専門課程の中で、同居しているなどとは、知るよしもありませんでした。岡津守彦先生がどのような先生であるかも知ることもなく、面談していた

だいた。実は、教育社会学をより勉強していた私は、当時教育経済学を目指していました。岡津先生は、では経済学部に行けと言われてましたが、私は、タイポロジーを目指したいのです、と食い下がったところ、研究生に採用していただくことになりました。一部始終を目撃していた助手の西村先生は、親切にお茶を出してくれて、岡津先生が出られたあと、温かく話しかけてくれました。「実は、僕も学芸大出身だよ」といわれたときは、驚きました。師範出身でもひるむなという意味が込められていたと思います。東大紛争の影響なのか、当時の東大には、他大学からの学士入学者が少なからずいたようです。西村先生に親しみを感じ、その後、親切にさせていただくことになったのは、このことが始まりでした。

学校教育の研究生として拾って頂いたとはいえ、当時の私は、卒論のテーマであったマックス・ウェーバーの教育類型学の夢を捨てきれず、教育社会学のゼミや持田栄一先生のゼミなどに闇雲に出席していました。でも、学問的にはあまり派手ではない学校教育の先生のお話は、大変興味を持つようになり、東学大とは全く異なる趣向に傾倒するようになりました。比較教育では山内太郎先生、教育方法では東洋先生、稲垣忠彦先生、吉田彰宏先生など、なぜか、同じ箱の中にいました。その中で、西村先生は、比較教育の番頭として、盾のような役割を果たしていました。どちらかという学校教育は、方法系の先生の方が有名であり、比較教育は劣勢でありました。その中で、西村先生は、その魅力を伝えようと一人気を吐いていたと言えます。

今は、比較教育の大御所となった西野節男氏などは、西村先生に連れられ、マレーシアなどをまわり、比較教育の魅力にとりつかれたひとりです。学校教育は面白いように学年ごとに教育方法に傾倒する派と比較教育に傾倒する派に分かれました。

残念ながら、東大の比較教育講座は、お家断絶の憂き目に遭ったのですが、最後までその城を守ろうという家老の役を演じていたのが、西村先生でありました。国際教育学会という学会組織は、そのような経緯から生まれました。その中心軸から生まれた惑星のような研究者諸氏は、今やそれぞれの領域で大御所となっています。

西村先生が世間に名をはせたのは、1970年代中頃、外務省との戦いでしょう。「天声人語」にも取り上げられた西村先生の名前は、外務省を論難するものでした。JICAの前身となる平和部隊の一員としてフィリピンに行く予定であった西村先生は、何かの手違いで行けなくなりました。そのことは外務省に落ち度がありと法廷で争い、勝ったのでありました。このことは、朝日新聞の「論壇」にも載り大きな話題ともなりました。

人と話をするときは物腰が低く、戦うイメージにはとても見えない西村先生でした。けれども、内に秘めた正義感は、人一倍強く、予想外の行動に出ることも時々でした。

東学大での最後のプロジェクトは、国際バカロレア (IB) とは異なる目的のエリートのものではない国際中等教育の可能性はないかを研究するというものでした。私も東学大の教授としてそのプロジェクトに加えてもらい、原稿を書かせてもらいました。それは、アメリカにおいては移民の子弟の多文化教育の問題であること、そして、職業につながる高校教育の問題であること、そして、経済の発展とともに職業的専門教育は、有名無実化し、算盤や手習いのように形式陶冶化すること、しかし、それは過去の遺物ではなく、未来につながる学力となるというようなことを述べさせていただきました。

西村先生にまつわる思い出話は、まだまだ尽きることはありません。晩年、国際教育ならぬ。北東北に興味をもたれ、異文化として見られている日本人の伝統文化のルーツを探り当てたということなのでしょうか。私も大変共感をもって西村先生の足跡を追っています。

## 西村俊一先生のご逝去を悼む

江原裕美（帝京大学）

西村俊一先生は初代会長の松崎巖先生とともに 1990 年に日本国際教育学会を創設され、ご自身も会長を務められた本学会の功労者のお一人です。大学院時代からお世話になっておりましたご縁もあり、在りし日の先生の横顔をご紹介したく思います。

本学会の立ち上げに際して先生が主張されていたのは、国際教育学の必要性でした。比較教育というベースを認識しつつも一国研究にとどまらず、国境を超えて起こる事象を捉えた国際的な教育研究を主張されていました。当時、先生が挙げられた国際教育学のテーマは驚くほど多岐にわたっています。また学問の蓄積の重要性、学者としての責任感という観点から思想、哲学、社会学等における理論的思考に学びながらの教育研究を追求しておられたと思います。

先生の著書ならびに編著の代表的なものは以下のとおりです。また先生自身が選んだ論考を集めた『国際教育研究』を毎年研究室から発行しておられました。他に科研の報告書や他分野でお書きになったものも多くあります。

- ① 『国際的学力の探究—国際バカロレアの理念と課題 (国際化時代の教育シリーズ)』 1989/4 創友社
- ② 『国際教育の創造—シンポジウム&公開講座 (国際化時代の教育シリーズ)』 1990/10 創友社
- ③ 『現代中国と華僑教育—新世紀に向う東アジアの胎動』 1991/2 多賀出版
- ④ 『国際教育事典』 1991/2 アルク
- ⑤ 『日本エコロジズムの系譜—安藤昌益から江渡狄嶺まで』 1992/7 農山漁村文化協会
- ⑥ 『地球環境と教育—未来をひらく緑のヴィジョン (国際化時代の教育シリーズ)』 1996/1 創友社
- ⑦ 『世界の外国人学校』 東信堂（西村先生が編者であるべきものです）
- ⑧ 『日本人教育の条件—グローバル化と人間形成』 2007/3 原書房

これらは日本の国際教育研究の足跡を示す貴重なものと思われまます。

先生に何度か本を頂きましたが、その分野で抑えるべき正統派の本を、労をいとわず集められており、発行年代を見て、かなり前から今日につながる研究テーマを考えておられたのだと感心しました。ご研究のテーマはすでに 1980 年代にアジアの教育発展、開発教育研究、国際バカロレア、海外日本人学校、華僑研究、中国帰国者子女の研究、外国人学校、などに着手され、のちに安藤昌益研究、環境と教育の問題、農村復興、古代史研究、日本におけるマルクス主義の歴史的吟味などへと発展していきました。常に、先達の学問的蓄積を振り返りつつ、現代への問題意識から研究されたので、非常に先進的な成果となったと思います。実際に現地に足を運ぶ調査、哲学・思想・歴史・社会学の深い教養が基礎にありました。行動する研究者としての先生の特色がよく出ているのが『日本エコロジズムの系譜』であり、共同研究の長所を引き出したのが華僑研究、外国人学校の研究、と『日本人教育の条件』でしょう。学者、知識人の役割とは何かについて、思想を言葉のみならず生き方で表す先人たちをお手本にされていたと思います。安藤昌益、江渡狄嶺、田中正造、北一輝らはいずれも、思想を人生の中で実践するために一生を賭けた人々です。野菜を栽培し、料理に腕を振るい、木彫に励んでおられたのは、先達の生き方の一端を身体で感じ取るためだったのではと推察しています。

『国際教育事典』は先生の舌鋒鋭い批判を載せており、他機関との論争もありました。思想の自由について外国人の先生と激論を交わしていたことがあります。その他にも学問的論争がありましたが、先生自身が敢えて強い言葉を使っていた節もあります。信じるところを追求する人であり、「丸く収める」人ではなかったので敵が多かったとも言えます。その生き方は理解されにくいかもしれませんが、実は先生こそ、欧米の学問の価値を知るがゆえ

に、日本の思想を掘り起こし現代の教育研究や世界の問題解決にその意義を示していこうと奮闘されていた人だと考えずにはいられないのです。

学問的には厳しく、人間的には細やかな先生でした。耳慣れない言葉を書くと指摘されましたし、考えもせず風潮に乗った書き方は厳しく叱られました。日本の農山漁村に心を寄せ、訪ねておられました。そういう時はお土産を持って帰るなど、周りの人たちを気遣う方でもありました。かなり前から「晩節を汚すことのないよう」、という先生の言葉が耳についていたのですが、このように早く逝ってしまわれるとは想像しませんでした。ただ御家族によれば、ご自分の葬儀一式の準備を全て整えてあったということで驚かされました。

現在の世界的情勢、日本の置かれた危機に際して先生なら何を語ってくださるだろうかと思わずにはいられません。最後のご編著が『日本人教育の条件』であったのは今を予測されていたのでしょうか。社会のあり方が激変する中、学問研究の役割もさらに重くなっています。日本とは、国とは何か。国際教育学会が「国」という言葉を含んでいるのは偶然ではなく、その問題意識が底流にあるからだと思います。大きな問題に対しても教育学者だからこそできる貢献、研究があるとおっしゃっていたことがあります。先生が問うている課題は根本的なものであり、答えは各人が求めていくしかないものですが、それだからこそ真摯な研究を行う場としての日本国際教育学会が今後も発展することを願うものです。先生もそれを願っておられることでしょうか。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

---

## 第 28 回大会報告

### 1. 日本国際教育学会第 28 回大会報告

大会実行委員長 吉田尚史（福岡女学院大学）

日本国際教育学会第 28 回大会は 2017 年 9 月 2 日（土）・3 日（日）の 2 日間にわたって福岡女学院大学において開催されました。今大会は地方開催でありながら、オーストラリアからのゲスト 3 名をお招きし、公開シンポジウム、2 つの課題研究発表、全 6 分科会による自由研究発表と非常に充実した内容となりました。

大会 I 日目午前中の自由研究発表は 3 つの分科会が行われ、各国の教育問題および異文化接触の問題などを中心に 9 件の発表が行われました。休憩をはさみ、午後の公開シンポジウムでは「多文化共生の学びと育ち」をテーマとして、オーストラリア・モナッシュ大学のゼーン・マ・レーア氏による基調報告の後、2 名の登壇者による報告と質疑応答の時間を持ちました。基調報告では世界中の多様な人々が移り住むオーストラリアの社会において、様々な民族文化や宗教的背景が生み出す複雑な教育ニーズに対応する教師教育の課題が提起され、2 名のシンポジスト、福岡市教育委員会元理事の徳成晃隆氏、福岡市日本語サポートセンター池田尚登氏からは福岡市における多文化化の経緯・現状、日本以外の国に文化的ルーツを持つ子ども達の学びの現状について報告が行われました。一般の参加者も交え、質疑応答により更に議論を深めつつ多文化社会における共生と教育のあり方を考える機会となりました。

公開シンポジウムに続く課題研究 I では、先住民族の教育権に着目し、「日豪比較を通じた先住民族の指導者・教員養成の展開と課題」をテーマに指導者や教員の養成という視点から先住民族研究者、実践者としてオーストラリアの先住民族の状況を、モナッシュ大学のジーン・フリーア氏、クイーンズランド工科大学のピーター・アンダーソン氏から、また日本のアイヌ指導者養成の現状と課題が上野昌之会員から報告されました。

大会2日目は、午前中の課題研究Ⅱ「複言語・多言語環境における教育支援の課題」から日程が始まりました。本テーマは、多文化社会における重要な課題の一つであり、多文化共生社会における外国語学習のあり方、英語運用能力の育成をめざす英語イマージョン教育の実践、英語授業担当教員の資質形成に関して西山溪氏、山口紀生氏、金山光一氏3名の専門家からの報告が行われ、日本の実態と今後の展望、課題について議論を深めることとなりました。

午後の自由研究発表では3つの分科会で合計9件の発表が行われました。1日目に続き各国の教育課題、特にアジア・オセアニアをフィールドとした報告やナショナルアイデンティティの問題が取り上げられ、会場の参加者とともに意見を交換する場となりました。2日目15:00には予定通りすべてのプログラムを終了し閉会することができました。

今大会は遠隔地にも拘わらず、44名の大会参加をいただきましたことに深く感謝いたします。また懇親会にも26名の会員とオーストラリアからの3名のゲストに参加いただき、和やかな会となりましたことを合わせてご報告いたします。

大会の開催に当たりましては、学会会長、副会長、事務局長をはじめ、理事の皆様、全国の学会会員の皆さまのご支援をいただき開催にこぎつけることができました。大会運営、司会の担当など多大なるご協力をいただきましたこと、改めて御礼申し上げます。

最後に今大会の運営にあたり、植田啓嗣会員（西九州大学）には受付、懇親会の設定など様々なご協力をいただきました。また大庭由子（安田女子大学）前大会実行委員長からは運営に関する様々な情報をいただくとともに、広報担当理事としてマスコミへの対応をお願いし、開催告知の記事を日本教育新聞8月7・14日付の全国版、8月28日付の九州版への掲載、公開シンポジウムに関する記事の10月16日九州版への掲載へと結びつけていただきました。深く感謝いたします。



2017年8月28日日本教育新聞九州版

## 2. 大会の感想

浦田帆乃香（学生スタッフ）

私は今回の大会に学生スタッフとして参加させていただきました。学会への参加は初めてで、受付として様々な方と触れあうことができたこと、国際教育に関する研究内容を聞く

ことができたことなど全てが新鮮で大変貴重な経験をすることができました。

私が所属している学科では、幼児教育や初等教育に関する専門的な知識や技能、教員免許を取得するための教育課程が組みられています。多文化共生や国際教育に関して大学の講義の中であらためて学ぶ機会があまりなかったため、学会に参加させていただく前までは未知の世界でした。今回、多文化共生や国際教育に関する様々な最先端の研究内容を聞くことができ、今までの視野や価値観とは比べ物にならないほど広がりや変化がうまれたように感じます。特に自分が専門に学んでいる内容に関わるため、初等教育の中で外国語教育をどのように授業で実践していくのか、言語環境・言語の多様性を児童同士や児童と教師の互いが尊重しあい共に学びを進めていく活動や多文化共生の学びの具体的な実践に関する報告は強く印象に残りました。次期小学校学習指導要領では、外国語活動や外国語（英語）の教科化が実施されます。そのため、いかにして目の前の児童に対して外国語を身近に感じさせることができるかと共に、楽しさを味わわせ「外国語(英語)を知りたい！話したい！」と児童が思うことができるかが重要になってくると考えています。そんな私にとって英語イマージョン教育の存在を知ることができたことは、今後小学校教諭として勤務する中で挑戦していきたいと思える教育活動でした。また、教師が児童に対し他国の文化や人と交流できるような機会を設けることにより、多様な価値観や幅広い視野を持った将来国際的に活躍する児童や多文化共生を広めていく児童を育成することにつながっていくということも学ばせていただきました。

最後になりますが、アジア各国や国内等の遠方から足を運んでいただき、学生である私にはもったいない程の貴重な機会を与えていただき、また様々な先生方と関わりを持つ機会をいただきましたこと、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

---

## 第 28 回総会報告

### 日本国際教育学会第 28 回総会議事録

日時：2017 年 9 月 2 日（土）17:00～17:45

会場：福岡女学院大学エリザベス・リー・ホール

記録：玉井昇

#### I. 報告事項

##### 1. 2016 年度（2016 年 8 月 1 日～2017 年 7 月 31 日）会務報告

(1) 会員数の現況

(2) 2016 年度活動報告

(3) 2016 年度決算報告

##### 2. 2016 年度会計監査報告

##### 3. 各種委員会報告

(1) 紀要編集委員会報告

(2) 紀要電子化推進ワーキンググループ報告

(3) 学会賞選考委員会報告

##### 4. その他

#### II. 審議事項

##### 1. 2017 年度（2017 年 8 月 1 日～2018 年 7 月 31 日）事業計画

(1) 2017 年度活動計画（案）

(2) 2016 年度予算 (案)

2. 海外関連学会との国際連携 (案) について
3. 学会創立 30 周年記念事業 (案) について
4. 「日本国際教育学会規則」改正 (案) について
5. 選挙管理委員の選任について
6. 第 29 回研究大会の開催校について
7. その他

以上

## 日本国際教育学会紀要『国際教育』第 24 号原稿募集

日本国際教育学会紀要編集委員会では『国際教育』第 24 号の発刊に際し、自由投稿研究論文、研究ノート、調査報告、教育情報、資料紹介を募集いたします (2018 年 3 月 1 日必着)。投稿希望の会員は以下の要領にしたがって投稿して下さい。なお、投稿原稿の募集に関しては、本学会公式ウェブサイト (<http://www.jies.gr.jp/>) の「学会紀要」のページで「編集規程」および「投稿要領」に関する最新情報を必ず確認するようにして下さい。

### ADDITIONAL GUIDELINES FOR ENGLISH MANUSCRIPTS CALL FOR PAPERS: JOURNAL of INTERNATIONAL EDUCATION, Volume 24

Submissions to the 24th edition of the Journal of International Education are now being accepted, with a deadline of March 1, 2018. Authors making submissions in English should review the following guidelines. Any manuscripts not conforming to this procedure will not be accepted. Authors should also refer to the latest version of this procedure in addition to the Provisions for Editing Bulletins of JIES on the JIES website (<http://www.jies.gr.jp/>) before submission.

## 第 29 回大会のお知らせ

実行委員長 太田 浩

第 29 回大会は下記の通り開催することとなりましたのでご案内いたします。多くの学会員の参加を心よりお待ちしております。

日程     2018 年 9 月 29 日 (土)・30 日 (日)  
会場     一橋大学 国立キャンパス (東京都国立市)  
          (<http://www.hit-u.ac.jp/index.html>)  
アクセス JR 中央線国立駅下車南口から徒歩約 10 分  
          (<http://www.hit-u.ac.jp/guide/campus/access.html>)  
          (<http://www.hit-u.ac.jp/guide/campus/kunitachi.html>)

## 2018 Conference Information

### 29th Annual Conference:

September 29-30, 2018

Kunitachi Campus, Hitotsubashi University (Kunitachi, Tokyo)

<http://www.hit-u.ac.jp/eng/>

Directions: 10-minute walk from the South Exit of Kunitachi Station on JR Chuo Line

<http://www.hit-u.ac.jp/eng/about/direction/index.html>

<http://www.hit-u.ac.jp/eng/about/direction/kunitachi.html>

For further information, visit our website <http://www.jies.gr.jp>

## 事務局だより

### 1. 連絡先・ご所属変更を至急お知らせ下さい。

所属変更等にもない会員資格や連絡先に変更がある方がおられましたら、事務局までメール ([jies\\_jimukyoku@jies.gr.jp](mailto:jies_jimukyoku@jies.gr.jp)) にてご一報下さい。

### 2. 新入会員

2016年度第2回理事会 (2017年2月11日) 7名入会

2016年度第3回理事会 (2017年6月17日) 7名入会

2017年度第1回理事会 (2017年9月2日) 2名入会

以上

日本国際教育学会 Newsletter No.29

編集発行 日本国際教育学会 代表 佐藤千津

発行所 192-0395 東京都八王子市大塚 359

帝京大学 玉井昇研究室気付

日本国際教育学会事務局

[jies\\_jimukyoku@jies.gr.jp](mailto:jies_jimukyoku@jies.gr.jp)

<http://www.jies.gr.jp>

発行年月日 2018年1月20日